

# 「わすれられないおくりもの」あらすじと本文 ポイント・名言とは？

## 「わすれられないおくりもの」あらすじ

### 【作者について】

「わすれられないおくりもの」は、スーザン＝バーレイさんが書いた絵本だよ。

お話といっしょにかかっている絵も、スーザン＝バーレイさんが書いた絵だよ。

スーザン＝バーレイさんは、イギリスの絵本作家で「はじめましてスマレひめよ」や「てろんてろんちゃん」などの絵本の絵もかいているよ。

「わすれられないおくりもの」に登場するあなぐまが出てくるお話には「アナグマさんはごきげんななめ」「アナグマのもちよりパーティ」という絵本もあるから、ぜひ読んでみてね。

### 【登場人物】

#### ・【あなぐま】

このお話の主人公。もの知りでかしこくて、いつもみんなにたよりにされているよ。年を取っていたので、ある日死んでしまったよ。

#### ・【もぐら】

あなぐまの友だちの一人。あなぐまの死を一番悲しんだよ。あなぐまに切りぬきを教えてもらったよ。

#### ・【かえる】

あなぐまの友だちの一人。あなぐまにスケートを習ったよ。



## ・【きつね】

あなぐまの 友だちの一人。あなぐまに ネクタイのむすび方を 教えてもらったよ。

## ・【うさぎの おくさん】

あなぐまの 友だちの一人。あなぐまに 料理を 教えてもらったよ。

## あらすじ

わすれられないおくりもの

文・絵 スーザン＝バーレイ やく 小川 仁央（ひとみ）

おとしよりの あなぐまは もの知りで かしこくて 森のみんなから たよりにされていました。

あなぐまは 自分の死が近いことを わかっていましたが、体がなくなっても 心はのこる と知っていたので、死を おそれてはいませんでした。ただ、自分が死んだら 友だちが悲しむことだけを 心配していました。

あるばん、あなぐまは 「長いトンネルの向こうに行くよ さようなら」と 手紙を書きました。

そして ゆめの中で 長いトンネルを 力強く走りながら、あなぐまは おだやかに 天国へ 旅立ちました。

次の日の朝、あなぐまの死を知った みんなは、とても悲しみました。

中でも もぐらは やりきれないほど 悲しみました。

その夜から 雪がふりはじめ、冬の間 みんなは あなぐまがいないことを 悲しみ、とほうに泣けていました。

春になり 外に出られるようになると みんなは あなぐまの思い出を 語り合いました。



そして みんなは あなぐまは 一人一人に、わかれたあとでも たからものとなる、ちえやくふうを のこしてくれたこと、そして ちえやくふうがあれば、たがいに助け合えることに 気づきました。  
それは、あなぐまがのこしてくれたゆたかさ でもありました。

こうして 春のおとずれとともに、みんなは 悲しみをのりこえました。  
あたたかい春のある日、もぐらは あなぐまが死ぬ前日に いっしょにすごしたおかに 登り、あなぐまに おくりもののお礼 を言いました。  
あなぐまとの思い出は もぐらにとって「わすれられないおくりもの」になったのです。  
もぐらは そばで あなぐまが聞いているような 気がしました。

## 「わすれられないおくりもの」内容とポイント

「わすれられないおくりもの」の場面分けごとに、内容とポイントを 確認しよう。

「わすれられないおくりもの」の場面分けは、「時間」によって、八つの場面に分けることができるよ。

登場人物の セリフやこうどうから、そのときどんな気持ちだったかも かんがえてみよう。

### だいの 場面 あなぐまのしょうかい

だいの 場面は「あなぐまは」から「言っていました。」まで。

【ないよう】あなぐまは かしこくて みんなにたよりにされていたよ。年を取っていたけれど、死ぬことをおそれていなかったよ。



## あなぐまの せいかく

あなぐまは「かしこくて、いつもみんなにたよりにされている」「こまっている友だちは、だれでも、きっと助けてあげる」「大変年を取っていて、知らないことはないというぐらい、もの知り」なんだね。

何でも知っていて、どんな相手でも助けるなんて、とてもやさしいよね。  
「あなぐまさんがいると 安心するな。」「あなぐまさんに そうだんしよう!」と 友だちが あなぐまを しんらいしている様子が そうぞうできるね。

きっと みんなにとって「先生」や「お父さんやお母さん」みたいな 大きなそんざいだったんじゃないかな。

## あなぐまの 死に対する考え

あなぐまは、「自分の年だと 死ぬのがそう遠くない」と知っていたね。  
あなぐまは おじいさん もしくは おばあさん なんだね。

でも、あなぐまは 死ぬことを おそれてはいなかったね。  
なぜかという、死んで体がなくなっても、心はのこることを 知っていたからだね。

ぼくは 死ぬって なんとなくこわいな。死んだらどうなるのか よくわからないから。心はのこるって どういう意味なんだろう？

お話を読むと「体はなくなっても心はのこる」とは どういうことなのかの ヒントがきくとわかるよ。いっしょに読んでいこう。

あなぐまは 死をおそれていないから 前のように 体がいうことをきかなくなっても、くよくよしたりしなかったね。



「体がいうことをきかない」とは、体の力が弱ったり、足やこしがいたかったりして、わかいころのように 元気よく 自由に動くことができない ということだね。

あなぐまは 年を取ってきたことにながかりせず、もうすぐ死ぬということをおだやかな気持ちで 受け入れていたんだね。

死ぬことへの心のじゅんぴが できていたんだね。

ただ、ひとつだけ、気がかりなことがあったね。

それは「あとにのこしていく 友だちのこと」だね。

あなぐまは 自分が死んだら 悲しむだろう友だちのことが 心配だったんだね。きっと「自分がいなくなっても、みんなには 元気で幸せに くらしてほしい。」という気持ちだったんじゃないかな。

死んだ後の 友だちのことを心配しているなんて やっぱり友だち思いで やさしいね。

だから、あなぐまは「自分が いつか 長いトンネルの向こうに 行ってしまっても、あまり 悲しまないように。」と言っていたね。

「長いトンネルの 向こうに行く」とは、死ぬ ということだね。

あなぐまは 今生きている世界と 天国は 遠いけれど トンネルで つながっている、死ぬ時がきたら まっすぐトンネルへ進めば 天国が待っていると 考えていたのかもしれないね。

それに「死ぬ」という言葉ではなく、「長いトンネル」という言葉を使うことで 友だちを こわがらせないように していたのかもしれないね。



## だい二の 場面 あなぐまは おかへ登る

だい二の場面は、「ある日のこと」から「自分も幸せな気持ちになりました。」まで。

【時間】ある日のこと

【場所】おか

【ないよう】あなぐまは、もぐらとかえると おかに登ったよ。とくに年を取ったような 気がしたけれど、幸せだったよ。

あなぐまは もぐらとかえるのかけっこを見るために おかに登ったよ。

あなぐまは 年を取っていて 体がいうことをきかないから おかに登るなんて つかれるし 大変だったよね。

お話といっしょにかかっている絵を見ると、つえをついて、走っているもぐらとかえを後ろから見守るように ゆっくり 登っているね。

「とくに年を取ったような気がした」とあるから、いつもより 体がおとろえてきたことを感じたのかもしれないね。

あなぐまは 「あと一度だけでも みんなといっしょに走れたら」と思ったけれど、それは無理(むり)だったね。

それでも あなぐまは 幸せな気持ちになったね。

なぜかという、友だちが 楽しそうな様子だったからだね。

あなぐまにとって 友だちの幸せは 自分の幸せなんだね。

## だい三の 場面 あなぐまは ゆめを見る(あなぐまの死)

だい三の場面は、「夜になって」から「すっかり自由になったと感じました。」まで。

【時間】夜になって

【場所】あなぐまの家

【ないよう】あなぐまは 「ふしぎな、でも すばらしいゆめ」を見たよ。



家に帰った あなぐまは 手紙を書いたね。  
そして、ゆりいすを ゆらしているうちに、ぐっすりね入ってしまったね。  
ゆらゆらと 心地よくゆれているうちに、いつのまにか 深いねむりについたらね。

あなぐまは ふしぎな、でも、すばらしいゆめを見たよ。  
どんなゆめかという、どこまでもつづく 長いトンネルを 走っているゆめだね。

あなぐまは だいニの場面で「あと一度だけでも みんなといっしょに走れたら」とねがっていたけれど ゆめの中では「足はしっかりして力強く、もう、つえもいらず」「体はすばやく動くし、トンネルを行けば行くほど、どんどん速く走れ」たんだね。

走れていることを ふしぎに思いながらも、体が自由に動くよろこびも感じていたから、「ふしぎで、でも、すばらしいゆめ」だったんじゃないかな。  
「長いトンネル」は、あなぐまが言っていた「死」を意味するようだけれど、あなぐまは死をおそれていないから、長いトンネルを とまどうことなく どんどん進んで行ったんだね。

あなぐまは とうとう、地面からうき上がったような気がしたね。  
まるで 体がなくなってしまったようだったね。

きっと あなぐまは 天国へ 向かったんじゃないかな。  
「体がなくなってしまったよう」とあるから、体から たましいがぬけたのかもしれないね。  
あなぐまが言っていた、「長いトンネルの向こう」に着いた とも考えられるね。

あなぐまは すっかり自由になったと感じたね。  
あなぐまは 心地いいねむりにつき、ふしぎさやすばらしさ、そして自由を感じながら、おだやかに 天国へ旅立っていたんだね。



## だい四の 場面 森のみんなは あなぐまの死を悲しむ

だい四の場面は、「次の日の朝」から「もうふをぐっしょりぬらします。」まで。

【時間】次の日の朝

【ないよう】森のみんなは あなぐまの死を 悲しんだよ。もぐらは やりきれないほど 悲しくなったよ。

### 森のみんなは あなぐまの死を 悲しむ

次の日の朝、友だちは みんな心配して 集まったね。  
なぜかという、あなぐまが いつものように おはようを 言いに来てくれないからだね。

きっと「あなぐまさんに 何かあったのかな？」という 気持ちだったんじゃないかな。

あなぐまは 毎朝 あいさつをしながら、みんなの様子を 見回っていたんだね。  
そして、友だちも あなぐまが 来てくれるのを 毎朝 楽しみにしていたんだね。

きつねが、悲しい知らせをつたえ、手紙を読んだね。  
「悲しい知らせ」とは「あなぐまは死んでしまったこと」だね。

長いトンネルの向こうに行くよ さようなら あなぐまより

あなぐまが だい三の場面、つまり死ぬ直前に 書いていたのが この手紙だね。  
あなぐまは もうすぐ死ぬことを感じて、友だちに おわかれのあいさつを のこしたんだね。

死ぬ直前まで 友だちを思う あなぐまのやさしい気持ちが 感じられるね。

森のみんなは 悲しまない者は いなかったね。



お話といっしょにかかっている絵を見ると たくさんの動物たちが よりそうように集まったり ハンカチでなみだをふいたりしているね。

## もぐらは 一番悲しむ

なかでも、もぐらは、やりきれないほど悲しくなったね。

一番悲しんだのが、もぐらなんだね。

もぐらは あなぐまに だれよりもお世話になっていて だれよりも あなぐまのことを大好きだったのかもしれないね。

もぐらは ベッドの中で あなぐまのことばかり考えていたね。

なみだは、あとからあとから ほおをつたい、もうふを ぐっしょり ぬらしたね。

もぐらは 起き上がることもできず 他のことも考えられないほど、ずっとなきつづけたんだね。

とても 悲しい気持ちでいることが わかるね。

## だい五の 場面 森のみんなは とほうにくれる

だい五の場面は、「その夜」から「とてもむずかしいことでした。」まで。

【時間】その夜

【ないう】森のみんなは 悲しみ、とほうにくれたよ。

その夜から 冬がやってきて 雪が 地上を すっかり おおいつくしたね。

けれど、心の中の悲しみを、おおいかくしてはくれなかったね。

つまり 森のみんなの心の中は 深い悲しみでいっぱいだったんだね。



動物たちにとって 冬は、外に出かけられる時間がへって、食べ物もあまりなく、家にとじこもる つらいきせつだよね。

みんな 自分の家にこもりながら、悲しい気持ちで うずくまっていたのかもしれないね。

冷たく、寒い雪や冬は まるで 悲しい気持ちでいっぱい みんなの心を 表しているようだね。

みんなは「あなぐまは、いつでも、そばにいてくれたのに—」と とほうにくれたね。いつもたよりにしていた人が とつぜん いなくなってしまうたら、悲しいし、ふあんだし、やる気もわいてこないよね。

きっと「あなぐまさん、帰ってきてよ。」「悲しいときは あなぐまさんが はげましてくれたのに、どうやって 元気になればいいの…?」という気持ち だったんじゃないかな。

## だい六の 場面 森のみんなは あなぐまの思い出を語り合う

だい六の場面は、「春が来て」から「たがいに助け合うこともできました。」まで。

【時間】春が来て

【ないう】森のみんなは あなぐまの思い出を語り合ったよ。あなぐまが ちえやくふうを のこしてくれたことに気づき、森のみんなは 助け合うことができたよ。

春が来て、外に出られるようになると みんなは あなぐまの思い出を語り合ったよ。ここでは、もぐら、かえる、きつね、うさぎのおくさんの 思い出が しょうかいされているよ。



	あなぐまから教わったこと	教わった時期	教わったきっかけ
もぐら	切りぬき		はさみを使うのが上手
かえる	スケート		スケートが得意
きつね	ネクタイのむすび方	子どものころ	どんなむすび方も、自分で考え出したむすび方も できる いつも、とてもすてきに ネクタイをむすんでいる
うさぎのおくさん	料理(しょうがパン)	ずっと前	料理上手は、村中に 知れわたっている

## もぐらの思い出

もぐらは あなぐまから 切りぬきを教わったね。

「切りぬき」は、遊びの一つだから もぐらは 子どもなのかもしれないね。  
だい二の場面でも、かけっこをしていたもんね。

はじめのうちは、紙のもぐらは ばらばらになってしまったけれど、手をつないだ もぐらのくさりか、切りぬけた時のうれしさは、今でも わすれられない思い出に なっているんだね。

そのきっかけ、もぐらは はさみを使うのが上手になったね。

あなぐまは きっと「はさみが使えると 役に立つし もっと楽しい世界が広がるよ。」  
「あきらめずに ちょうせんするって すばらしいことだよ。」「何かができるようになるって とてもうれしいんだよ。」という 思いで 教えてくれたんじゃないかな。



## かえるの思い出

かえるは あなぐまから スケートを習ったね。

あなぐまは かえるが 一人でりっぱにすべれるようになるまで、ずっとやさしく、そばについていてくれたね。

そのけっか、かえるは スケートが得意になったね。

あなぐまは スケートのコツだけでなく「スケートができると 寒くてつらい冬も 楽しいよ。」「相手によりそうと、相手も うれしい気持ちになるよ。」ということも 教えてくれたんじゃないかな。

## きつねの思い出

きつねは あなぐまから、ネクタイのむすび方を教わったね。

「子どものころ」とあるから、きつねは 大人なんだね。

ネクタイをむすぶから 男のきつねで はたらいているのかも しれないね。

あなぐまに 教えてもらったけっか、きつねは今 どんなむすび方もできるし、自分で考え出した むすび方もできるね。

あなぐまから 教えてもらったことを さらにやってんさせて 自分で考えたり、工夫したり、もっとすてきにしていっているんだね。

ここには「むずかしそうなことでも やってみると いつか自分の力になるよ。」「自分で考えたり、工夫すると、自分らしいあなたになれるよ。」と いう あなぐまの思いがこめられていたんじゃないかな。

## うさぎのおくさんの思い出

うさぎのおくさんは、あなぐまから 料理を教わったね。

「おくさん」ということは、大人の女のうさぎだね。



うさぎのおくさんは、はじめて料理を 教えてもらった時のことを思い出すと、今でもやきたてのしょうがパンのかおりが、ただよってくるんだね。

このけいけんがきっかけで、うさぎのおくさんは みんなにみとめられるほど 料理が上手になったんだね。

あなぐまは「なにかを手作りするのは 楽しいよ。」「おいしい料理は 人を元気にするよ。」「人によろこんでもらえると 自分の心もゆたかになるよ。」という 思いで 料理を 教えてくれたのかもしれないね。

四人とも あなぐまから教えてもらったことが 好きなことや得意なことに つながっているね。

あなぐまは 一人一人に ちえやくふうを のこした

もぐらやかえる、きつね、うさぎのおくさんのように、森のみんなだれにも、なにかしら、あなぐまの思い出があったんだね。

あなぐまは、一人一人に、わかれたあとでもたからものとなる ちえやくふうを のこしてくれたんだね。

「ちえやくふう」とは、切りぬきやスケート、ネクタイのおすび方、料理などの 遊びや仕事、生活を うまくやっていくための のうりよくや方法 のことだね。

このちえやくふうは 一人一人にとって「たからもの」のような大事なものだったんだね。

つまり 自分をささえてくれたり、遊びや仕事、生活を かがやかせてくれるような すてきなちえやくふう ということじゃないかな。

四人の思い出からも、ちえやくふうを ほこりに思う気持ちや ちえやくふうのおかげで 生き生きとしている様子が 感じられるね。



みんなは 思い出を話しているうちに「あなぐまさんは 昔からずっと 子どもも大人もふくめて 一人一人に ちえやくふうを つたえてくれていたんだね!」「あなぐまさんはいなくなってしまうけれど 教わったちえやくふうは 私たちの生活や心の中にしっかりと のこっているね!」ということ を 発見したんじゃないかな。

みんなは、それで、たがいに助け合うことができたね。  
「それ」とは、ちえやくふう のことだね。

それぞれのちえやくふうを 教え合えば、みんなで力を合わせて くらしていけることに 気づいたんだね。  
今まで あなぐまにたよっていたけれど みんなで 助け合うことの 大切さやすばらしさにも 気づいたのかもしれないね。

## だい七の 場面 森のみんなは 悲しみをのりこえる

だい七の場面は、「最後の雪が消えたころ」から「話すことができるようになったのです。」まで。

【時間】最後の雪が消えたころ

【ないよう】森のみんなの 悲しみは消え、あなぐまとの楽しい思い出を 話すことができるようになったよ。

最後の雪が 消えたころ、あなぐまが のこしてくれたものの ゆたかさで、みんなの悲しみも 消えたね。

だれかがいつも、あなぐまとの楽しい思い出を、話すことができるようになったね。

雪といっしょに、悲しい気持ちも とけるように なくなって、あたたかい春のおとずれとともに みんなの気持ちも明るくなったんだね。



「あなぐまが のこしてくれたものの ゆたかさ」とは、「わかれたあとでも たからもの となる、ちえやくふう」のことだね。

さいしょは「あなぐまさんが いなくて悲しい」という気持ちで、みんなは とほうにく れていたよね。

でも みんなで あなぐまの思い出を話していくうちに、だんだんと心が元気になり、「あなぐまさんと いっしょにすごした時間は、幸せだったね。」と思い出を 前向きにとらえられるようになったんだね。

そして、一人一人につたえてくれた ちえやくふうは、実は あなぐまが 森のみんなの ために のこしてくれた「ゆたかさ」だと 実感したんじゃないかな。

「あなぐまさんは 自分たちが 幸せにいらしていけるように ゆたかな生き方を 教えて くれていたんだ!」と気づいたんだね。

あなぐまが だいの場面で「長いトンネルの 向こうに行っても 悲しまないように」とねがっていたことが この場面で 森のみんなにも とどいたんだね。

## だいの 場面 もぐらが あなぐまに お礼を言う

【時間】あるあたたかい春の日

【ないよう】もぐらが あなぐまにお礼を言うと、そばで あなぐまが 聞いている気がしたよ。

### もぐらが あなぐまに お礼を言う

あるあたたかい春の日、もぐらは、いつか かえると かけっこをした おかに登ったね。このおかは、あなぐまが 死ぬ前日に いっしょにすごした場所だから もぐらにとって 大事な思い出の場所だよ。



もぐらは、あなぐまに おくりもののお礼を言いたくなかったね。

「おくりもの」とは、だれからだれへの どんなおくりものかな？

それは あなぐまが もぐらや森のみんなに つたえてくれた「たからものとなる ちえやくふう」であり「あなぐまが のこしてくれたものの ゆたかさ」のことだね。

「おくりもの」って おたん生日やクリスマスにもらう、おもちゃや絵本やおかしなどの「物」のプレゼント というイメージがあるよね。

でも あなぐまから みんなへのおくりものは、形がある物ではなく、くらしや生き方が ゆたかになるような ちえやくふうだったんだね。

もぐらは「ありがとう、あなぐまさん。」と言ったね。

どうして もぐらは あなぐまに お礼を言ったのかな？

それは きっと 切りぬきを教えてくれた思い出は「もぐらが これからも ゆたかで しあわせにくらしていけますように」という気持ちをこめて 教えてくれた、あなぐまからの「おくりもの」だったと気づいたからじゃないかな。

そのことに気づいた もぐらにとって あなぐまとの思い出が とても大事な「わすれられない おくりもの」になったんだね。

「ありがとう」という言葉には、きっと「おくりものを のこしてくれたから、悲しい気持ちを のりこえることができたよ。」「あなぐまさんが教えてくれた ちえやくふうを、今度はぼくが、みんなにも つたえて、みんなで 力を合わせて 行くよ。」という気持ちもこめられていたんじゃないかな。

もぐらは、なんだか、そばで あなぐまが 聞いているような気がしたね。

きっと もぐらは 心の中に あなぐまを 感じていたんじゃないかな。

たとえ すがたは見えなくても、会えなくても 心の中であなぐまを思えば、いつでもどこでも あなぐまを感じる事ができたんだね。



もぐらや森のみんなの心の中や ちえやくふうに、あなぐまの思い出や あなぐまの  
思いが たしかに 生きているよね。

あなぐまが「体はなくなっても 心はのこる」と言っていたは、このことだったんじゃない  
かな。

## 作者が伝えたかったこと

このお話をとおして 作者は きっと「大切な人の死は 悲しいけれど、人は死んでしま  
っても その人の思いや教えてくれたことは 生きている人の心に のこりつづけるこ  
と」「大切な人の思いや 教えてくれたことを 大切にしていけること 悲しみをのりこ  
えたり、人と助け合ったりでき、幸せにくらしていけること」をつたえたかったんじやな  
いかな。

## 「わすれられないおくりもの」名言

「わすれられないおくりもの」には、たくさんの 名言(めいげん)が どうしようするよ。

名言とは、そのことばから たいせつなことを まなぶことができる すばらしい ことば  
のことだよ。

「わすれられないおくりもの」の名言から、みんなは どんなことを かんがえたかな。

・「アナグマは、死ぬことをおそれてはいません。死んで、からだがなくなっても、心は  
残ることを、知っていたからです。」

・「友だちの楽しそうな様子をながめているうちに、自分も幸せな気持ちになりました  
た」

・「あなぐまは、すっかり自由になったと感じました。」



- ・「長いトンネルの向こうに行くよ」
- ・「あなぐまは、一人一人に、わかれたあとでもたからものとなるような、ちえやくふうをのこしてくれたのです。」
- ・「あなぐまがのこしてくれたもののゆたかさで、みんなの悲しみも、消えていました。」
- ・「もぐらは、なんだか、そばであなぐまが、聞いていてくれるような気がしました」

## 「わすれられないおくりもの」みんなの感想

「わすれられないおくりもの」は、「たいせつな人を なくしてしまう」きもち、「みんなをおいて 長いトンネルのおこうへ いかなくては いけない」きもち、いろんな たちばかり いろんなことを かんがえることができる おはなしだよ。

「わすれられないおくりもの」を よんで、みんなが どう かんじたか かんそうを まとめたよ。

たいせつなひとが しんでしまったら とても かなしいよね。

でも、この おはなしを よんで、「おくりもの」には「目には みえない おくりもの」があることを したよ。

そして、その「おくりもの」は、ずっと ころろの中で いきつづけるんだ。

たいせつなひとが くれた 目には みえない たいせつな おくりものを だいじにしようとおもったよ。



アナグマさんは とても すてきな人だね。  
アナグマさんを みて、おじいちゃん、おばあちゃんを おもいだしたよ。  
おじいちゃん、おばあちゃんも とても ぼくに やさしくしてくれるんだ。  
おじいちゃん、おばあちゃんに おしえて もらったこと、ぼくにも たくさんあるよ。  
おとなになっても、きっと わすれないんだ。

おとうさん・おかあさんの かんそう

じぶんも、こどもたちや まわりの たいせつな人に、わすれられない おくりものを  
のこせる人になりたいです。

おとうさん・おかあさんの かんそう

いのちは いつか なくなってしまうもの。  
この おはなしは、こどもたちが「いのちが なくなること」について むきあえる とて  
も すばらしい おはなしです。  
ともだちの たいせつさ、ちえや いきていくための くふう、あいすること。  
そして、たいせつな人を なくしてしまっ、その かなしみを どう のりこえるか。  
とても たいせつなことを かんがえる おはなしです。



## 「わすれられないおくりもの」意味調べ

「わすれられないおくりもの」で使われていることばの意味をまとめているよ。

※「わすれられないおくりもの」の中で使われている意味なので、ちゅういしよう。

言葉	意味
あなぐま	イタチのなかま。タヌキににているよ。トンネルをほってすむよ。
かしこい	いろいろなことを知っていること。あたまがよいこと。
たよりにされる	その人のことをしんらいして、その人がいれば「あんしん」と思われること。
もの知り	いろいろなことを知っていること。
おそれる	こわがること。
くよくよする	しかたがないことを、ふあんに思ってなやむこと。
気がかり	気になること。
ゆりいす	ゆらゆらと、ゆれることができるイスのこと。
やりきれない	がまんできないこと。
おおいかくす	上からかぶせて、見えなくすること。
とほうにくれる	どうしていいかわからず、ぼんやりすること。
たがいに	おたがい。
知れわたる	たくさんの人が知るようになること。
ただよう	ふわふわと、ういてはこばれてくること。
なにかしら	なにか。
ゆたかさ	みちたりていること。じゅうぶんなこと。

